

## [COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>  
E-mail:comm.tko@nsk.org  
PHONE:03-3433-0987  
FAX:03-3433-8678  
Diocese Office



第67号

(通巻1302号)

2023年12月24日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

## 《クリスマスメッセージ》

## 暗い世の中に灯された小さい光

司祭 シモン・ペテロ 上田 憲明

「その名はインマヌエルと呼ばれる。」これは、『神は私たちと共におられる』という意味である。

(マタイ1:23)

「どこに神はおられるか、どこで出会えるのか」という歌詞で始まる聖歌459番は、まさにこの世の暗いニュースや悲惨な出来事の知らせが次々とやってくる時に、人々が心の中に思い浮かべることではないだろうか。そして人によって「神はいない」と結論づけ、人間の愚かさだけでなく、宗教の無力さを人々に喧伝するような人々もいる。こういったことは今に始まったことではなく、歴史の中で、何度も、少しずつ違った形であるが、現れては消えていった。自分に都合のいいところに、自分ではなく、人にとって本

当に神さまが必要な時には、神さまの方から人の方に向かってきてくださることを聖書は告げている。だから、聖書は、人が神を探す物語ではなく、神が人を探す物語を残してきたのではないだろうか。「主なる神は



アダムと呼ばれた。『どこにいるのか』(創世記3:9)、「まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」(エゼキエル書34:11)、イエスさまも一匹の羊を探し求める羊飼いの話(マタイ18:12、14)をされている。

クリスマスの物語も、暗い世の中に灯された小さい光の話である。それも人々

を通して、ヨセフが勇気を持ってマリアを受け入れ、マリアも悲惨な未来の方だけを見るのではなく、神さまがもたらしてくれる恵みや祝福を信じて、自分の使命を受け入れていったのではないだろうか。神さまが人々を救うために用意されたのは、そういった人たちを通して、生まれてきた赤ちゃんだった。ヘロデ大王に象徴されるこの世の力は、すぐにその赤ちゃんを亡き者にしようとする。まさに風前の灯火のような光である。消えてしまいうようなその光は、また神さまの助けと、ヨセフ・マリアの苦勞によって、光り続けていくことが語られる。人として生まれ、不安定な生活の中であっても、希望を持ち続けて歩む人たちに囲まれて、育ったイエスさまも、また、人々に希望をもたらし、神さまの愛を表す人となっていかった。マタイによる福音書は、そのイエスさまのもう一つの名を記している「インマヌエル」と。暗闇にいて、明日

も見えない人々に、神さまはわたしたちと共にいてくださる方であることを、イエスさまはその生涯を通して、とりわけその十字架の悲惨な死を通してわたしたちに示しておられる。今も悲惨な現実を見て、「神はいない」となってしまうような、そんな迷いの中に陥ってしまうわたしたちを、神さまは探し求め、一緒にいようとしてくださる方であることを聖書は証している。

クリスマスを祝う人々の心に、そういう光が灯されますように。そして、その光を受けた一人一人が、また、その光をこの暗い世界で灯していくことができますように。



## 日本聖公会宣教協議会

いのち、尊厳限りないもの

「となりび」となるために」

宣教主事 福澤 真紀子

日本聖公会宣教協議会（11月10日）

13日）から帰って私は考えています。

この4日間の学びや気づき、喜びや葛藤をどのように東京教区の皆さんと共有していけるだろうと。今回配信が行われ、会場にいない方々にも一部のプログラムが開かれていたことは画期的なことでした。もしできれば、録画されているプログラムを、降臨節そして顕現節と続くこの期節に、少しずつでも見てくださいと皆様にお願したいと思っています。実際の会場ではプログラムの後、分科会や小グループの話し合い、バイブルシェアリングを通じて「となりび」となる」とは何か、神様



からの呼びかけへの気づき、またそれに教会はどうか

●プログラムの録画は日本聖公会宣教協議会ブログからご覧になれます。

プログラムの区切りが分かりづらいことから、YouTubeの画面下表示による時間をつけます。

〈11月10日（金）1日目〉

4:50～「みのり持ち寄りブース紹介」 11教区のこの11年の取り組みと現状が示され、それぞれの教区の特徴溢れる時間となりました。

4:12:50～「私たちのあゆみ～物語を聴く」 屋我地聖ルカ教会、厳原聖ヨハネ教会、大館聖パウロ教会の話は、聞く人の心に光を与えました。

6:16:00～「開会礼拝」

〈11月11日（土）2日目①〉

5:10～「朝の礼拝」 祈祷書改正の理念や現状について冒頭に説明があり、礼拝では改正式文（試用版）の一部である詩篇を用いました。

55:40～「テーマ・聖句・思いの共有」 宣教協議会のテーマと聖句、「宣教」とは何か全体に向けて語られました。

1:13:45～「いのちの現場から聴く」 こどもと共に、性的少数者として、カルト問題と宗教、スピリチュアルケアと傾聴、ホームレス支援での出会い、5人の語り手によるそれぞれの現場と経験の話。

3:56:20～ギターとリコーダ奏楽による「昼の祈り」

〈11月11日（土）2日目②〉

5:30～青年達による「分かち合いの礼拝」

〈11月12日（日）3日目①〉

0:00～「主教会からのメッセージ」 日本聖公会が宣教協働区・伝道教区制を決めた背景について話があり、その後3つのテーマで10人の主教がリレートークをしました。

1:29:00～「宣教協働区アワー」 東日本、中日本、西日本の宣教協働区からの報告。この後、宣教協働区ごとに集まり、出会いと交わりの時間をもちました。

〈11月12日（日）3日目②〉

7:00～セイフ・チャーチをテーマに「夕の祈り」 NCC発行の『すべての暴力を克服する10年一祈りつつ行動するための手引き』から朗読が用いられました。

〈11月13日（月）4日目〉

5:40～「宣教協議会からの呼びかけ作成」 宣教協議会中にグループで話し合われ出された事柄をまとめ「呼びかけ」を作成するため参加者代表によるドラフトコミティーが立てられました。このプログラムで「よびかけ」案について討議しましたが、時間内にはまとまらず、協議会後も引き続き検討することとなりました。

2:41:30 「閉会聖餐式」



話し合いを深める時間をもちました。清里後の今、それをもう一度紐を解いて、東京地方にある教会の現実とすり合わせていく必要があります。4日間のプログラムを噛み砕いて糧とし、問い続けています。

教会は神様のみ言葉を聴くことなし

には歩めません。また同時に、教会は地域社会や今の時の世界に向かって目を開き、耳を傾け、現実を見つめることなしに、神様のみ言葉に生きて応えることはできないと私は思います。「となりび」となるために」教会が、そして私自身が、神様ではなく自分の

目的や都合のために置き去りにしてきた人やものに気づき、変わっていかれたらと思います。宣教協議会からの「呼びかけ」がまもなく出てくると思いますが、東京教区の全ての教会が、その「呼びかけ」に触れることができるよう機会を作って参ります。



## 「自分」に向き合った

清瀬聖母教会 岸田 静枝

ちんぷんかんぷんのまま参加しました。前回2012年の宣教協議会から10年間の「実り」を持ち寄るということで、東京教区の参加者のみなさんは試行錯誤で準備を進めてゆかれたのに、一方私は、何を言い訳に抜けようかと、そんなことばかり考えていました。

1日目の夕食後、対馬の厳原聖ヨハネ教会の録画が流れました。高齢のお3人が、ある主日はたった1人でも教会の扉を開けて、み言葉の礼拝を守っておられる。さらに「財政的にも厳しいけれど、いつもどうにかなってしまう」「ちゃんと神さまが助けてくださるから、教会を閉めないで済む」とおっしゃっていました。

10年間の実り？ それを自分ごとに引き寄せてみる。さまざまな波風の中でも、どんなに支えられてきたかという私の10年間。それに向き合ってゆくことならできる。神さまはいのち

であり、イエスさまは希望です。そう思ったら、ほっとしました。

気になったことを二点。『いのち』をテーマに上げているので、「障害」



者やハンセン病回復者も参加できるようにしてほしい。もう一点は、清泉寮の本館ホールに「日の丸」が掲げられていたことです。

## 月島聖ルカ保育園 園長 高久 真佐子

2023年2月の「宣教協議会に参加してみない？」というお声がけに「清里か、いいな」と軽い気持ちで快諾してしまった私でしたが、3月のオリエンテーション後は不安が募るばかり。2012年の提言に沿った信仰生活を意識してきたわけではないのです。た

だ、私の勤める月島聖ルカ保育園も、この宣教・奉仕の場として神様から与えられたものです。そこに勤める私が、宣教方針の方向性を考える場に怖気づいているのでは、保育園が根無し草になってしまふ。宣教協議会の場において、多くのことを感じ、刺激を受けて、保育の幹になるものを探ってみようと思いました。

今回の宣教協議会は、多くの出会いと、



多くの学び、さらに多くの刺激を私に与えてくれました。道半ばの感覚はあり、保育の幹につながるものは、まだ霧の中のようなものです。参加したことで、私自身を見出し招いてくださった神様に感謝し、保育園や地域を通して、ともに歩む道を探っていこうと思うようになりました。



11月10日(金)～13日

(月)の日程で、清泉寮にて、2023年日本聖公会宣教協議会が開催されました。各教区から、また管区諸委員会から信徒と聖職132名が集まり、「いのち、尊厳限りないもの」となりびととなるために」をテーマとして、日本聖公会のこれまでとこれからについて分かち合い、話し合いました。ここでは速報としてその概略を記します。

### 「実り持ち寄りブースの紹介」

このプログラムでは、前回の宣教協議会から現在までの各教区や管区諸委員会の働きにおいてどのような実りがあったのか、また現在の課題は何かを、ブースの展示を通して分かち合いました。各ブースから多

くの实りの報告がありました。中には、解決していない課題も、また実りの一つとして大切に扱おうとするブースもありました。「私たちのあゆみ」物語を聴く」

3つの教会の信徒の皆さんのお話を聴きました(録画映像を視聴)。3つの教会は信徒数の少ない教会ですが、それぞれの教会で豊かな信仰生活が営まれていることが分かち合われました。

### 「いのちの現場から聴く」

5人の語り手の皆さんから、「となりびと」と出会い(あるいは当事者として仲間とともに歩み始め)、今も一緒に歩み続けている物語をお聴きしました。お一人おひとりのお話が、それぞれに心に深く残るもの

でした。その後、語り手ごとに5つの分科会に分かれ、さらに分かち合いの時を持ちました。

### 「主教会からのメッセージ」 「宣教協働区アワー」

武藤謙一首座主教から、宣教協働区・伝道教区制導入の経緯についてお話がありました。また他の主教からは、「この世界の中で『となりびと』となるために大切にしたいこと」、「この世界における宣教・牧会で大切にしたいこと」、「宣教協働・教区再編において大切にしたいこと」という3つのテーマでお話がありました。その後、各宣教協働区グループに分かれて交わりの時を過ごしました。

2回にわたる「グループシェアリング」では、小グループに分かれ、前半は、それまでのプログラムの感想を述べ合い、後半は、最終日の「2023年宣教協議会からの呼びかけ」作成に向け、「私たちが、神様の招きに対して応答

できなかったことは何か」「私たちは、招きにどう応えていくか」が話し合われました。その後、グループごとの発表を全体で分かち合いました。

最終日に、ドラフトコミットイメンバーによる「呼びかけ」案をもとに意見交換が行われましたが、時間内では収まらず、その場で最終的なことにまとめることは難しいとの結論となりました。「呼びかけ」はドラフトコミットイメンバーが改めて案を作り、参加者の合意のもとに正式なものとして出される予定です。

宣教協議会の録画映像は、「日本聖公会宣教協議会ブログ」から現在でも視聴可能です。ぜひご覧いただき、日本聖公会のこれらについて、皆さんと一緒に考えていければと思います。

(文責…司祭北澤洋)

### 《信徒リレーエッセイ》

聖書100週間

東京聖十字教会

高頭 迪明

若い時から聖書を読み通したいと思いつつも、一度も達成することがなかった。

10年程前になるが、知人に勧められカトリックの「聖書100週間」というプログラムに参加してみた。創世記から始めて全聖書を配分表に従って約3年半で読み通すというプログラムである。1グループ14名(カトリック13名、聖公会1名)、司会者と神父でスタート。このコースのユニークな点は14名の参加者が毎週1回集まり各自読んだ同じ章の感想を皆の前で発表するという点にある。聖書の正しい解釈ではなく、感じた点や印象に残った言葉について話すので、聖書を夫々の異なる観点から味わうことができた。苦しいこともあったが長くて楽しい聖書の旅であった。3年後「ヨハネによる福音書」を読み終えた14名の仲間には聖書を通して強い絆が生まれ、喜びと恵みが与えられた。



## 東京教区成立100周年記念感謝礼拝



2023年11月3日 香蘭女学校

11月3日（文化の日）13時から香蘭女学校において、東京教区成立100周年記念感謝礼拝が行われた。出席者は約350名（教区教役者33名、他教区聖職8名、ゲスト33名）であった。式は教区ホームページより観ることが出来ますので出席されなかった方も是非ご覧ください。

## 「司祭のこころ」

## 小説『バラバ』

パール・ラーゲルクヴィスト著  
岩波文庫1975年刊

司祭 下原 太介

♪想像してごらん 全ての人がただ  
平和に暮らしているとき…

想像してごらん 全ての人がが世  
界を分かち合っているとき…

…そして、いつか君も仲間になっ  
てくれたら、世界は一つになるのだと♪

ジョン・レノン『Imagine』より

クリスマスの季節  
を迎えると、清々し  
く張り詰めた冷たい  
空気と、美しく穏や  
かに瞬くイルミネー  
ションの光の中を  
縫って、愛と平和を  
求める人々の優しい  
祈りが、この歌詞に  
乗って、私たちの耳と心に響き渡り  
ます。



愛に満ち溢れた、その  
後の生涯を…  
想像してごらん、そ  
の方と共に十字架を担ぎ、  
ゴルゴタの丘を上ったキレ  
ネ人の、信仰的目覚めを…  
想像してごらん、そ  
の方を死へと引き渡した  
ポンテオ・ピラトの、

その後の後悔と嘆きを…

想像してごらん、その方の十字架上  
での最後の叫びを耳にした群衆の、  
驚嘆し、畏怖する姿を…

想像してごらん、その方の死と引き換  
えに、十字架をその背中から下ろした、

大罪人バラバの命の行く先を…

♪想像してごらん♪という呼び掛け  
は、主イエス・キリストと直接、相ま  
みえることのできない、今この時を生  
きる私たちの信仰にとって、非常に大  
きな意味を持つように思います。

「想像してごらん、クリスマスの夜  
に生まれた幼児が眠る、  
飼ひ葉桶のみすぼらしさを…」

想像してごらん、クリスマスの夜

に生まれた幼児と出逢い、  
笑顔を取り戻した人々を…

想像してごらん、クリスマスの夜に生  
まれた幼児が救う、  
苦しみに満ちた幾多の魂を…

想像してごらん、クリスマスの夜に生  
まれた幼児が迎える、  
愛を貫く、耐え難い最期を…

想像してごらん、その方の衣の裾に触  
れ、癒された女性の、

想像してごらん、その方の衣の裾に触  
れ、癒された女性の、

想像してごらん、その方に触れられ、  
癒された盲人が目にした、

新しい世界の広がり…  
想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

想像してごらん、その方が群衆の前で  
高く抱き上げた少年の、

## 神様の人

司祭 池 星 熙

私たちは皆、神が土で作った最初の人・アダムの子孫です。神様はご自分の似姿に人を作り、ご自分の命の息を吹き込まれ、人々も神様の息吹を持つようになりました。そして世の中の万物を創造し、人間に名前をつけさせ、そのすべての動植物を自由に管理できる特権までも与えてくださいました（創1…26…27）。

滅ぼさないとという約束の印として虹をプレゼントしてくださいました。その後、ノアの子孫は繁栄し、世界中に広がっていききました。再び人が世界中にあふれ出るほど増加すると、人々の罪も再び溢れ出しました。神様は再び人々を滅ぼしたかったのですが、以前の約束があったため、人々の代わりに罪を負うご自身の貴重なひとり子であるキリストを人の姿でこの世に送られました。イエスは人の罪のために、人が人として経験しなければならいすべての苦痛を受けながら殺されます（四福音書）。

このようにして私たちはイエス様の死は私達の罪によるのだと悟ったのです。弟子たちが初めてイエス様の死を見た時、恐怖を感じてイエス様を捨てて皆逃げます。しかし、再び復活したイエス様に会ってか

らは、その恐怖に打ち勝つように死に勝てる新しい希望を持つこととなります。つまり死を超える信仰を知り、死を喜びとして受け入れる境地にまで至りました。イエス様が昇天した後、弟子たちはイエス様の福音を伝え、イエス様が宣言し



た神様の国を人々に知らせようと宣教し、世界中にイエス様を伝え始めました。福音を伝える途中で多くの弟子たちは殉教します。しかしその姿を見て覚えていた同時代のキリスト者たちも死を恐れずにイエス様の福音を伝えました。そし

て、多くの人が殺されます。その数は数え切れないほど多く、そのような状況の中でもイエス様を信じる人はさらに増えました。

このように私たちが信じるキリスト教は、多くの人の殉教を通して成長し広がった宗教です。死ぬ人が多くなるほど信仰を持つ信徒が増える奇跡の宗教になりました。その結果、キリスト教はローマを中心として公認され、世界に伝播されました。このようにキリスト教がアジアに伝道される過程でも、多くの殉教の過程を経なければならいせんでした。殉教を経験し、死に勝って定着した宗教は、容易には消えません。ところがそのように世界中に伝えられたキリスト教は、今日、長い間信仰の中心であったヨーロッパを中心とその勢力をますます失っています。

その理由は何でしょう？ 戦争の時期を越えて平和の時代が長い間続いたからでしょうか？ 私はそうは思いません。私たちが死を前にしてでもキリストを告白した信仰を次第に失って行ったためだと思います。今はもちろん殉教の時代ではありません。イエス様を主だと告白するために死ななくてもいいのです。ただ、もう一度反芻しなければならいのは、死までも乗り越えることができたその信仰を振り返るべき時代ということです。時代に応じた新しい信仰の悟りが必要です。

私は今、日本聖公会が新しさを必要とする時であり、皆が努力をしていると思います。私たちの教区でも、新しい教区のシステムについて語られています。何かを始める前に、私たちが持っている信仰がどんな



ものか、その信仰のために何をすべきかをまず考えなければなりません。自分のことを話す前に、主の道と自分が進むべき信仰の道について深い黙想をしなければなりません。私たちのほとんどすべての問題は、私たちが持っている信仰に起因するからです。

私たちが今、一つを得ようとするなら、一つを失う



今この瞬間、私たちの新しい境遇を越えようとするなら犠牲と放棄を選択する信仰がなければ奇跡を産むことはできないでしょう。これは、私たちの信仰の祖先が示した新しい課題を成し遂げようとする歴史の産物でもあります。

奇跡は自らを越えて神様を見る時、私たちに与えられる神様からの恩寵だからです。信仰の決断が必要な時期が近づいています。共同体のため、何も変わらないようなら変えようと動かなければなりません。何か新しいものを望むなら、自分を失うことを恐れなくてください。自分を変化させずに新しいものを得ることはできません。これが信仰の先祖たちが見せてくれた歴史なのです。

ことも考えなければなりません。イエス様が苦痛に勝ち、信仰の力で神の道を選択し、死に勝ち乗り越える力を見せてくださいました。それを見た弟子たちは殉教を越えて恐れを越えて神を受け入れ、私たちの信仰の先達たちはそのように活動しながら教会の柱を立ててきました。

(大韓聖公会ソウル教区司祭)

## 急逝された藤崎陸安さん

全生園聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂チャプレン

司祭 大森 明彦

藤崎陸安さんは全生園聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂の信徒代表であり全国ハンセン病療養所入所者協議会事務局長として多くの人々から頼りにされておられました。

8月18日に体調の不安から国立埼玉病院に検査入院され、9月12日に退院され、その夜発熱し、園内の病棟で過ごされ、翌朝埼玉病院へ救急搬送され、翌14日朝に亡くなられました。

藤崎さんが8月に入院されてから、奥さんが店長をされている全生園内のなごみ食堂に私は水曜日に立ち寄り、藤崎さんの様子を毎週うかがっていました。藤崎さんの急逝は関係を持つ誰にとっても大きな驚きと悲しみになり、まだその死を受け入れられずにあります。

藤崎さんのご遺体は午後3時頃全生園病棟霊安室に戻り、お別れの会が営まれました。それ

から全生園会堂へのご遺体は移され、そこで福祉課の人々により納棺が行われました。全生園では園内の方が亡くなられると園葬が行われます。全生園園長が主催し、逝去者の宗教による葬送式を会堂で開き、園全体(入所者と職員)で出棺まで見



送り、火葬場から戻ると、また園全体が納骨堂に集まり埋葬に立ち会います。納棺後、園葬の日程は9月19日(火)となり、聖公会の葬送式を行うことになりました。教会関係では園内居住の信徒の他は司式者と奏楽担当者の出席が許されただけでし

た。全生園ではコロナ時代が今も続き、礼拝堂での主日礼拝も相変わらず非公開で、厳しい警戒が続いています。2022年から交流教会となっている草津聖バルナバ教会・聖慰主教会の松浦信司祭は出張で近くに来られているのに葬送式の出席がかなわず、当日は志木聖母教会で祈りを合わせてくださいました。

礼拝堂では藤崎さんの席に写真といつも使われていた祈り文が置かれています。なごみ食堂の一隅にも藤崎さんの写真が置かれています。あちこちの学校で人権学習の講師をされていた藤崎さんの急逝を知ったある小学校から生徒たちの藤崎さんのご冥福を祈る言葉が届いています。「知らないことはよくない。知ろうとしないことはもっとよくない」という藤崎さんの言葉が子どもたちの心に響いています。私たちもそうありたいと思います。ヨハネ藤崎陸安さんの魂の平安を心からお祈りいたします。

ちょっと聖書、ときどきユーモア五十八（最終回）

1. 聖誕教会

牧師「イエスの生まれたベツレヘムの馬小屋のあったとされる場所には聖誕教会という立派な教会が建っています」  
信徒「さぞかしそこには壮麗で大きな門があるのでしょうね」  
牧師「それが十字軍のときの要塞でもあったので馬が入れないように入り口は小さいのです」  
信徒「なんと人間は身勝手な、もともと馬小屋だったのに馬が入れないとは・・・」

2. 導き

信徒A「うちの教会は行き方がよくわからない人には、星が導いてくれます」  
信徒B「えっ、おたくの教会では、そんな三人の博士みたいなことがおきるんですか」  
信徒A「いや、教会までの道を、案内担当の保志（ほし）さんが導いてくれるんです」

3. クリスマス？

信徒A「24日に血液検査の結果を病院に聞きにいったんだ」  
信徒B「どうだった」  
信徒A「いろんな数値が悪くなっていて、飲む薬が増えたよ」  
信徒B「それじゃあ、クリスマスじゃなくて、クスリ増すだね」

4. 信徒の顔

牧師「最近の若い人の顔、特にアイドルの子たちの顔はみんな一緒に見えて覚えられないよ」  
信徒「それは先生も年をとって記憶力が悪くなったせいじゃないですか」  
牧師「でも信徒の顔はちゃんと覚えられますよ」  
信徒「どうせ信徒はみんな年寄りばかりですからね」

5. よい羊飼いは？

牧師「牧師は、信徒から『良い羊飼いは』と呼ばれるようではなればいけないね」  
妻「あら、あなたもみんなから似たように呼ばれているわよ」  
牧師「ほんとかい？」  
妻「ほんとよ、みんなから『酔う羊飼いは』だって」

6. 闇営業

牧師「今年は闇営業をします」  
信徒「そんなことをしていいんですか」  
牧師「今年のクリスマスは『深夜礼拝』するということです」

7. 沈みかけた船で

乗務員「この中に牧師さんはいらっしゃいませんか」  
牧師「私が牧師だが」  
乗務員「それでは、お祈りをお願いします」  
牧師「船が沈まないようにですか？」  
乗務員「いや、幸運を祈ってください、救命具が1つ足りないの」

8. 管理司祭？

信徒「先生は管理司祭なんですよ」  
司祭「結婚してから、ずっとそうだね」  
信徒「えっ？」  
司祭「ずっと妻に管理されてるからね」

9. ミス

ある牧師が、教会の改修工事のために募金のお願いの文章をつくり信徒に配布した。  
すると、たちまち信徒たちからクレームが殺到した。なぜならその文面の「教会の『改修』のために・・・」  
というところが、変換ミスで「教会の『改宗』のために・・・」となっていたからだ。牧師はあわててその書面を「会衆」から「回収」した。

10. DNA？

信徒「やはりDNAですね、今日のあなたの説教はお父さんそっくりでしたよ、まるで亡くなったお父さんが乗り移ったみたいでした」  
2世牧師「すみません、父の説教ノートをそのまま使わせてもらいました」

おまけ クリスマス謎かけ

漫才師の「霜降り明星」とかけてまして  
クリスマス・プレゼントが手ぬぐいだけだった時ときます  
そのころは、  
「せいや（聖夜）」に「粗品」です。

編集後記

私が広報委員長をお引き受けし、それまでの毎週教区時報を発行していた体制を「教区ニュース」と「コミュニティオン」の2本立てにしてから13年になります。

はじめの頃は要領も悪く編集の日はほぼ12時を過ぎ、家に帰るのが夜中の2時過ぎということもよくありました。これもなんとか面白いものを作りたいという思いからです。

特に印象に残っているのは、多くの司祭、主教にインタビューをしたことです。中でも故竹田主教には本文に書ききれない多くの面白い話を聞きました。私が「これからしてみたいことは？」と聞いた時、その返事に「あとはどうやって死ぬかだな、理想は生きたまま穴の中に埋まり鈴を鳴らしながらお祈りして即身仏みたいになることだよ」と笑いながら語っていたのを思い出します。

来年以降は北関東との協働など新しい広報の在り方が求められると思います。新しいぶどう酒は新しい革袋に、いつまでも同じ人が委員長をしいては大胆な変化は望めないでしょう。はじめは試行錯誤で混乱もあるかもしれませんが、産みの苦しみと思えば温かい目で見守ってください。

また、ご意見、ご要望などありましたら広報のメールまで、お寄せください。

広報委員長 渡辺 康弘

次回 イースター号 3月31日発行予定